

〔書評〕

山村順次著 志賀高原観光開発史

一、本書の意義 「観光」が学問研究の対象としてとりあげられるようになったのは比較的新しい。未開拓であったこの分野に新しい研究を進めてきて、先頃『観光地理学』（浅香幸雄と共編著、昭和四九年九月大明堂刊）を刊行した著者は、このたび本書を徳川林政史研究所より出版した。

「あそび」がいやしめられ、罪悪視されるという「偏見」の中で、従来、おもに生産の問題をとり扱ってきた経済地理学者には、消費の一形式である観光現象を軽視し、かつこれをいかにあつかうべきか、答えられなかった（青木栄一・山村順次「日本における観光地理学研究の系譜」人文地理二八巻二号）ために、観光現象を研究対象として取りあげられることが少かった地理学（のみならず他の学問領域においても同様の理由で少かった）の分野において、著者はもっぱらこの「観光」ととり組み、多くの労作を発表してきた。本書は、わが国の人口集中地域に近く、スキーヤーに古くから親しまれている長野県の志賀高原をとりあげ、その観光開発の過程を明らかにし、それが入会集団としての財団法人和合会が土地を支配し、山稼や農業で生計をたてていた多くの会員が、志賀高原で観光業を営むことを特権として許すとともに、和合会自体も観光開発にあたり、その反面、外来観光資本の自由な進出を一切拒否してきたことを強調する。わが国の多くの観光地域が、外来観光資本による勝手

な乱開発の結果、さまざまの好ましからざる影響を地域あるいは、地域社会に及ぼしている現実を知悉している著者は、志賀高原の観光開発が地元の和合会の自主的な開発によるものである点を評価する。近年、山村振興策としての観光開発が叫ばれ、しかもそれが、往々にして共有地が外来資本の手で開発された結果、地域社会の破壊を招来している現状をみるにつけ、地域住民の主体性において、国立公園行政と一体化して、今日の一大観光地域を形成してきたことは特筆に値するという。これは観光開発の過程を通して山村地域の歴史地理学的分析であるとともに、山地の観光開発に対する著者の理想像をも描き出そうとしたものともみることができよう。

二、志賀高原の地理的性格 志賀高原は、焼額山・岩普山・赤石山・横手山・白根山・万座山など、一、九〇〇〜二、三〇〇メートルの山々に囲まれた、渦状熔岩地形の志賀山（二、〇三六メートル）を中心とする標高一、五〇〇〜二、〇〇〇メートル、面積一、五〇〇平方キロメートルの広大な高原である。志賀山の噴出した熔岩による熔岩台地状の地形で、大小のスロープや平坦地、七〇余の湖沼群、そして溪谷や温泉にも恵まれている。標高一、四二〇メートルの丸池における年平均気温は五・三度、特に夏の平均最高気温は八月で二二・一度で冷涼であり、夏季の避暑地として好適である。降水量は年間一、九六〇ミリメートル、降雪は一月中旬から四月上旬の間で、積雪量は二月中旬頃が最高で約二・五メートルになるが地形的に差異がある。一〜三月には晴天が多く、標高による粉雪の存在とあいまって、スキー場としての発展の一因をなしている。標高一、五〇〇メートル以上では亜高山帯針葉樹やブナ林、以下の標

高の地帯にはダケカンバなどの落葉広葉樹林が茂り、特に志賀山付近の針葉樹の原生林や琵琶池（蓮池）長池周辺のシラカンバ林の群落は見事である。二、〇〇〇メートル級の山頂部にはハイマツ群落や高山植物がみられ、高原部ではワタスゲ湿原、ミズバショウの群落があり、春から初夏にかけてはゼンマイ・ワラビ・フキ・タケノコなどの山菜狩りも出来、春の新緑、秋の紅葉など観光価値をいっそう高める。

三、温泉の開発と和合会 第一章の「志賀高原の観光基礎条件」では志賀高原の自然や和合会のこと、そして第二章の「明治・大正の渋温泉と志賀高原」では多くの温泉の開発やとくに渋温泉の往時の姿を描く。

享和二年（一八〇二）の発哺、文化四年（一八〇七）の熊の湯など、すでに近世期に温泉の開発がみられたが、第二次世界大戦後にいたり、さらに木戸池温泉（昭和三〇年）、丸池温泉（昭和三四年西発哺より引湯）、硯川温泉が開かれた。明治三四年には地獄谷から引湯して上林温泉、沓野温泉が開設された。山ノ内温泉郷の中心は渋温泉で、その温泉集落の構成員は和合会会員である。

志賀高原における約三、〇〇〇ヘクタール余の和合会の所有地は明治二二年の土地台帳制定の時、当時の沓野区（旧沓野村）の住民山本利左衛門外二九二名（旧戸といひ、その後加入の会員と区別する）の連名で共有山林として登記がなされた。明治三八年に沓野区共有地となり、その後会員の移動で若干の変化があったが大正二二年に地上権設定、昭和二年に正式に財団法人和合会が認可され、翌年平穏村へ贈与、同年六月和合会へ地上権移転譲渡がなされ、沓野

・渋・横湯組の部落民の山稼ぎの場として利用されてきた。和合会員は、内規によると、沓野区内に居住する正会員（旧二九三名）とその分家である準会員（入林権付与者）とに分れているが、準会員は年々増え、昭和四九年三月末現在で和合会員数は四五九名となっている。正会員が沓野区外に転出した時はその資格を失い、転出した時は三年後に復権するが、準会員は復権は認められない。これらの会員は入林権をもつとともに、林野以外の土地につき、賃貸によって観光的に利用する特権をもっている。共有林野での山稼ぎ（白薯材生産・木炭・根曲竹、薪材・干草の生産）と沓野その他の農業との組合わせて生活を維持してきた人々は、同じ共有地をスキー場・旅館・保養所など観光的に利用することにより、その生活は安定し向上した。

農業集落沓野の近くでは、伝統的温泉集落としての渋温泉があり明治初年では温泉寺門前に集落が規則的に並び、特に中央部の大湯を中心に宿屋が形成されている。各所に共同浴場が分布しているが、周りではまだ宿屋営業はみられず、食料品・雑貨などの商店がある。明治一五年になると温泉一、旅館三二戸、一カ年の浴客数は約三二、〇〇〇人でわが国有数の温泉場であった。共同浴場が湯治場の中核的存在で、大湯組・初湯組などの共同浴場利用集団の組織がづくられていた。やがて、湯量増が必要となり、大正末期に地獄谷から引湯し、共同浴場と各旅館の内湯へ分湯した。信越線は明治二六年に開通したが、豊野・中野・山ノ内間には浴客用人力車が運行されていて、入湯圏はまだまだ局地的段階にとどまっていた。

志賀高原の土地利用は、明治・大正・昭和初期を通じもっぱら前

述のような沓野区民（和合会々員）の山稼ぎによるものが主であったが、大正四年の平穂村沓野区有財産管理規程にみられるように、瀧満滝・暮岩・仏岩付近のような景観のすぐれた地区を設定して、区有林野の一切の伐採を禁止しており、すでに風景の維持保護に配慮されていることがわかる。そして大正期に入り、林産物の搬出とともに一方では自然景観や温泉などの観光資源が注目され始め、林業と観光の両面から交通の整備が重要となってくる。

大正二年、横浜の貿易商であったドイツ人のキンメル夫妻が上林温泉を訪れ、オーストリア式スキーと一本杖を持参して付近を滑ったが、これが平穂村への最初のスキー導入であった。その地元で与えた影響は大きく、大正九年、当時冬の閑散期対策を考えていた上林温泉鹿表閣の小林民作の理解と熱意により、青年層からの発案で「信州山ノ内スキークラブ」が実現、昭和八年まで連続一三回にわたり上信越スキー大会が開催された。

四、観光開発の展開 第三章「志賀高原の観光萌芽期」（昭和初期）第二次世界大戦まで）ではまず長野電鉄の進出が注目される。

昭和四年、以前から志賀高原の観光資源に注目して開発の意図を持っていた社長の神津藤平の申し出により、和合会は沓打茶屋以東熊の湯にいたる二〇〇万平方メートルの所有地を、二〇年間無償で提供する賃貸契約を結んだ。その借地証書でみるように、志賀高原の観光的土地利用の高度化を推進するべく、地元民が外来資本の導入を図ったのであるが、それはあくまで和合会の主導権のもとでの土地開発であった。大正一一年、屋代・須坂間、昭和二年には地元民の強い要望により、長野・湯田中間の鉄道が開通した。地元では山

林資源を守るか、観光的土地利用に変えるかにつき議論がつくされたが、結局、永久に山を守るとともに、その一部については観光開発をなし、しかも地元側が開発に規制をつけることで意見の一致をみた。長野電鉄は大正一一年、志賀高原開発の拠点として湯田中遊園地を開設、大正一二年、小林民作と協力して上林温泉の湯量を引湯により増加し、温泉プールその他の施設を設けて整備した。昭和三年、神津社長は上林温泉の遊園地一帯のスロープをスキー場として整備、渋上林間に電鉄バスを運行、翌年、当時のスキー先進国ノルウェーから来日中のスキー選手ヘルゼット中尉を招き、さらには翌年にはオーストリーのシュナイダーが訪れた。ヘルゼット中尉は志賀高原のすばらしい景観を賞讃し、案内者の麻生武治に「東洋のサンモリッツ」と囁いたといわれる。神津社長は麻生の協力を得て志賀高原のスキーツアー・コースの開発を行ない、多数のスキーヤーの訪れをみるようになった。

昭和一〇年三月、鉄道省国際観光局は志賀高原を、妙高・菅平も含めて「上信越国際スキー場」に指定、国際スキー場としての地位に応じた宿泊・観光施設の充実、整備にせまられ、和合会は土地や温泉などを県当局に無償で提供して整備につとめた。以上の開発に歩調をあわせ、宿泊保養施設や茶店及び関連施設が発生、和合会員も進んで茶店を経営したりヒュッテを設けたりし、冬のスキーシーズンのみの季節的営業から年中営業へと移行、また大学・会社などの山小屋も進出、バスの運行路線も延長された。

第四章「志賀高原の観光発展期―第二次世界大戦後―昭和三〇年代末頃まで」では、戦時中、志賀高原が各種の資材供給・食糧増産

の場として利用されるようになり、薪炭林伐採が行われたり、旅館が陸軍病院に指定されたりしたが、戦後にいたり、米軍の進駐により志賀高原の観光地としての発展の基礎が作られたとする。丸池スキー場が接収され、わが国ではじめてのスキーリフトが架設された。昭和二十七年、米軍の接収解除とともに地元で払い下げられ、長野電鉄がこれを引受ける。昭和二十一年秋、和合会組織のもとで志賀高原観光協会が設立され、志賀高原の今後は観光開発に期すべきである」とされる。

昭和二十四年九月、谷川連峰・草津・白根・妙高原とともに志賀高原は上信越高原国立公園に指定され、管理事務所は丸池に設置され、志賀高原は観光レクリエーション地域として大きく前進を開始する。一方、昭和二十五年二月には、開発を地元民の利益になるようチェックする機関として、和合会は志賀高原運営委員会を発足させる。運営委員会は地元民の意見を聞き、これを国・県の公園形成に反映するとともに、和合会員の志賀高原進出の申請のチェックも行った。運営委員会の構成はやがて、和合会・長野電鉄の正規の構成員のほか、オブザーバーとして国・県・町の関係者も参加することになり、このように官民一体となって国立公園の諸事業を検討し、運営するというわが国でも類をみない組織となった。ここで著者はこの運営委員会の議事録を二七頁に亘って掲載する。この運営委員会を基盤にして、やがて和合会会員の観光業進出がはかれることになる。昭和四九年までに志賀高原への進出者は一三八人、旅館業経営には八五人、会社・学校などの寮の管理人となった人は四一人のほり、特に沓野集落からの進出者は一〇五人と多い。

昭和三〇年代に入り、大企業の寮進出が急激に進むが、このような動きの中にあつて昭和三四年十一月、和合会が大株主となって志賀高原観光開発株式会社が設立され、これがその後の志賀高原観光開発の中核的存在となる。著者はここで会社の定款、さらに株式募集通知や株式発行目論見書、事業概況報告書などを掲げる。

第五章の「志賀高原観光高度展開期—昭和四〇年代—では、このような体制のもとで観光開発が高度に進められてきている近年の状況を述べる。まず、広域観光ルートとしての志賀草津道路が昭和四〇年八月に開通、さらに秋山林道と奥志賀スノーバー林道が開設される。観光客・スキー客が激増し、スキー場の開設も進み、リフトは今日五七本に達した。開発K・Kの経営もこのリフトの経営を中心に大きく伸びる。国立公園区域内の集団施設地区が指定されて和合会の会員の観光業への進出が具体化し、農協の多額の融資が行われる。著者はここで志賀高原の観光施設や観光客の動向に就き述べる。また観光行政にもふれ、環境庁が国立公園一般の観光施設基準を定め、それを直ちに国立公園行政としておろしてきたことに対する和合会の反発を指摘する。そして和合会との協議に立って定められた昭和四九年三月の集団施設地区旅館区取扱要領を掲げる。

長野電鉄の借地は昭和四四年七月で契約期限がきたが、その後和合会との折衝を経て、昭和四八年、さらに二〇年間の土地貸借契約がまとまったが、この契約では長野電鉄が有償で借地しなければならぬことになった。志賀高原の観光的土地利用の価値が著しく高まってきたことに応じ、和合会の力が強くなったことを意味している。最後に著者は和合会理事長の将来計画の意見を掲げるが、そ

れは進出会員の過当競争の調整と自然保護である。

五、論評 本書は志賀高原というわが国有数の一大総合観光地域が、地元の和合会の主体的開発によって形成されてきたことを明らかにしたものである。わが国では観光開発が新しい時代のものであるだけに、その歴史も明治以後、とりわけ第二次世界大戦後の新しい時代に中心が置かれている。従来、観光地域をとりあげて総合的に分析した研究がほとんどみられない中であって、本書のように単行本として出刊されたことは注目し値するといえよう。時代を追い、刻明に、多くの資料を掲げて開発の過程を論述しており、正に観光の歴史地理といったところであろう。しかも開発の中心、主体として地域社会の和合会の役割に注目し、観光開発に関する筆者の理念を展開したのもといえよう。

しかし、この和合会なるものが如何なる性格の、どのような構造をもった地域社会であるのかについてはほとんどふれられていない。本書は、まえがきにあるように、『和合会の歴史—志賀高原の歩み—上・下巻』のうち著者の担当、執筆した「志賀高原の観光開発過程」を補筆、訂正し、参考資料と年表を加えて一冊にまとめたものであり、以上の如き課題は『和合会の歴史』にあるのかもしれないが、本書でもこの問題に若干ふれられ、和合会の主体性のもとに志賀高原の開発が進められる過程において、この地域社会としての和合会の推移、変容にもふれられてほしいと思われる。著者は観光地理学を専攻する地理学者であり、もっぱら「観光開発」のみに主眼点が置かれているのもっともであるが、和合会の役割を強調する以上、和合会、地域社会に関しても分析が進められてもよいのでは

ないかと思われる。

志賀高原は素晴らしい自然観光資源で充されており、それが開かれて一大観光地域に形成されたのは、一つにはわが国における、とくに第二次世界大戦後における「観光需要」であり、しかもわが国の最大の人口集中地域である京浜や中京から近く、交通の便に恵まれていたからにはほかならない。観光地理学の素人である読者にとつて、志賀高原の開発の形が、わが国の観光地域開発上どのような意義があるのかが明確でない。他の観光地域の事例と比較して若干、専門的な解説があってもよかつたのではないか。とくに和合会の役割を強調する意味で。

次に、和合会を中心とする観光開発の理念や計画がどのようにして考え出されたかということである。当初、長野電鉄が先鞭をつけて外人スキーヤーや麻生武治のようなスキー家によって指導されているようであるが、観光地域開発の問題としてどのような意義、価値があるのであろうか。すなわち和合会の志賀高原に対する観光開発理念の問題である。その点、専門家である著者の分析と評価があってもよいのではないか。道路が開かれ、施設がつくられ、多くの観光客が入り込むようになるだけが観光地域の開発にとって期待されるものなのかどうか。また、志賀高原は山地であり林野でもある。この林野と観光利用の問題にもっと具体的にふれてほしい。徳川林政史研究所が本書のような課題の書物の出版を行ったことに対し敬意を表した。(昭和五〇年七月二〇日刊 徳川林政史研究所 非売品 A5版 三九一頁 (中田栄一))